

を焚夜と俱にあたり、糧は焼餅又は煎物、飯を持者は能焼て肌に付たり、火を通さる物は凍て食ひがたし、尤水なき場所にて渴飲すれば、其所を究印を立置こと也。斯て夜明て下山し、午時過中にて死、又四十歳計の男一人、山に醉て正體なかりしが、是は四五日惱みて快氣せりと云、按るに、此若男は血氣に任せて自ら根氣を失ひし也、都て斯る高山に登るに必強氣なるは惡し、専ら元氣を丹田によく治て、平氣にして少も急がず登るがよし、是嶮嶺に登るの一法也、山に醉ことは間あること也、それは元氣薄きによりれり、兎に角に一氣臍下に凝然たれば、山に醉こともなく、又靈異あるも、よく正敷觀る事也、御嶽山權現土人ハ御ト云は世に知る靈山也、麓に社家有、寺あり、六月十二日十三日祭禮也、近郷の男女群參す、此日五穀成就の祈禱大般若轉讀勤行也、御山禪定は百日精進せずしては上り得ず、其間は行場に入て修行をなす、晝夜光明眞言を誦し、水垢離をとる也、其料金三兩貳分、百日が間の行用とす、如斯なれば、輕賤の者は登り得ず、生涯大切の旨願ならねば籠らずと也、頂山に至る事一里半、大日如來を安置せりとかや、

社家は御祭日神前にて祓祝辭を申、此兩日市をなして、賑ひ夥しと也、

信州にては、此兩山聳て目に立也、御嶽は北に在、駒が岳は南に在、又東南に惠那が嶽とて高山有り、土俗云、此山の神は伊勢大神宮御母神なれば、二十一年毎の御遷宮には必御柱木は此山より出る也といふ、冊尊を祭奉るにや、然らば惠那が嶽は胞衣嶽成べし、

(信濃奇勝錄)
伊那郡駒岳

駒が岳は木曾と伊那の間に秀、十餘里に連亘して、實に屏風を立たるが如し、俗に三十六峯八千ヶと云、續日本紀曰天平十年八月信濃國獻神馬、黑身白髮尾云々、駒岳の名此に出るか、宮所小野牧、みな其下に有、今村に龍飼山あり、宮所に龍が崎あり、皆是山脈、因て龍を以て號るなるべし、馬